

介護福祉士養成課程における学生の観察力の変化 幼児教育課程修了者を対象とする1年課程の場合

Changed Observation Skill as Students of Care Social Workers

(2000年3月31日受理)

原田 眞澄 岡田 淳子
Masumi Harada Junko Okada

Key words : 観察力 Observation skill, 介護福祉士 Care social worker, 教育 Education

Abstract

One of the special abilities the care social workers are required to possess is the observation skills. The Welfare Majors from our junior college have improved their observation skills over a year of study by increasing numbers of the observations, utilizing their own perceptions and devising methods to describe what they observe.

はじめに

「社会福祉士及び介護福祉士法」の制定を受けて、1989年に日本で初めて、有資格者としての介護福祉士が誕生した。有史以来、家族機能として行われてきた介護が、高齢者・障害者の複雑なニーズやデマンドに応える専門職として位置付けられたのである。

本学でも、平成11年度から、短期大学幼児教育課程を修了した学生を対象にして、介護福祉士の養成を開始した。専門職に期待される専門的な知識と科学的な実践能力の修得をさせることを考えれば、一年間という養成期間はあまりにも短い印象を受ける。しかし、介護の水準を向上させる意味では、職場の自己研鑽と並んで、教育が担う役割は非常に大きいと考えられる。筆者らは、こうした社会の期待を重く受け止めながら、一期生の教育に専念した。

介護福祉士は、専門職としての歴史は浅く、学問として確立することが望まれている段階である。いくつかの実践に関する研究はみられるが、多職種に比較して多いとはいえない。しかし、それぞれの体験を客観視することは、今後の教育の一つの指針として有意義であると考えられる。

今回は、一期生の教育実践のなかから、学生の観察力に焦点を絞り、一年間でどのように変化するかを明らかにすることを目的として研究をおこなった。4月と1月に同じ条件下で調査し、そ

の観察内容を統計的に処理して、若干の考察を加えた。短期間の教育であっても、観察力に大きな変化があったことを認められた。そこで、今後の一年間養成課程の教育内容を検討する指標となることを期待して報告する。

I. 研究目的

介護は、人間を対象とする専門職である。その対象理解の基盤をなすのは、観察という技術である。しかし、4月に授業のなかで「静物の観察」を行ったところ、学生は観察項目を2～3個しか書くことができなかつた。また、第三者に理解できるような記述が少ないことも特徴であった。人間にはモノにはない心理や行動が存在するので、基礎的な観察力が身につけていなければ、介護の質的向上は望めないと思われる。

そこで、筆者らは、一年間の介護技術教育目標のなかに、“学生の観察力が高まる”ことを設定した。一年間の養成課程が終了する段階で、現状を把握しておくことは、今後の教育の指針ともなる。学生の「静物の観察」について、観察力の変化とその特徴を明確にすることを目的とする。

II. 研究方法

1. 調査対象：C短期大学専攻科介護福祉専攻 1期生 40名
2. 調査期間：1999年4月～2000年1月
3. データ収集方法
 - 1) 学内介護実習室を使用した。
 - 2) 暗赤色の変形花瓶（図1）を実習室の中央に配置し、その周囲を学生が囲み、花瓶を観察しながら観察内容を自由記載した。
 - 3) 観察から記述までの制限時間は20分とした。
 - 4) 上記条件のもとで、1999年4月13日と2000年1月11日の2回実施した。

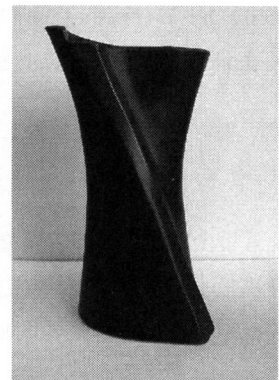


図1 変形花瓶

4. データ分析方法
 - 1) 2回の自由記載した内容を数量化するため、記述内容とスケッチ（図2）を点数化した。点数基準は、意味が読み取れる言葉一つに対して1点・平面スケッチ1点・立体（影）的スケッチ

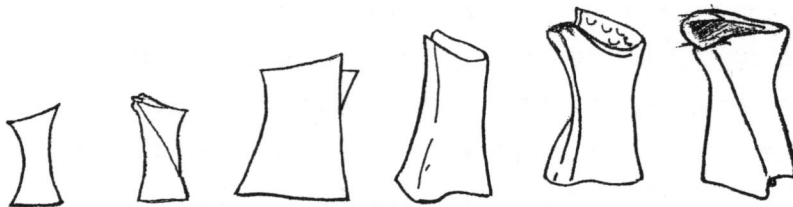


図2 スケッチ

チ2点とした。学生1人あたりの記録数を抽出し、EXSEL2000で統計的処理をおこない、度数分布をみる。

- 2) 自由記載してもらった観察内容を「色彩」「形」「材質」「その他」に分類し、さらにその項目をカテゴリー別に抽出した。

「色彩」については、明らかに色を示す“色相”，暗いや渋いなど感じとった“印象”，光彩で変化する“明度”に分けた。「形」については、いびつとか複雑な形といった“印象”，漠然とした全体的イメージを比喩表現している“容姿”，外観を見たまま記録した“外形”と数値で表した“目測”に分けた。「材質」は陶器やプラスチックといった“材料”と、つるつるやなめらかなど“性質”を表したもの、硬そう・重そうという“印象”に分けた。「その他」には上記には分類できなかった“使用用途”，寂しそう・辛そうなど感情を表す“感情的印象”と実際に体験した“事実”に基づいて記録したものに分けた。

カテゴリー別分類から度数集計表を作成し、統計分析プログラムSTARを用いて有意性の判定をおこなう。

- 3) 受容器である視覚・聴覚・触覚・嗅覚・味覚の五感のうち、どれかを活用した記録表現を抽出し、検定をおこない五感の活用状況を明らかにする。

Ⅲ. 結 果

1. 自由記載した記録数だけを表1から単純にみると、4月は学生一人あたりの平均記録数は4.7個であったが、1月は学生一人あたりの平均記録数は10.2個で、ほとんどの学生が明らかに上昇した。

4月は標準偏差0.88で、図3が示すように、観察記録できる数に個人差はほとんどみられなかったが、1月になると標準偏差3.83と、記録数にばらつきがみられ、学生間の個人差が出現した。

また、図4のとおり、学生個々の記録数の増加は5個以上が63%（24名）で、10個前後に記録数が増加した学生が多い。しかし、記録数が減少した学生も10.5%（4名）いた。

表1 記録数の変化

	1999.4 (N=40)	2000.1 (N=39)
文章数	189	384
スケッチ数	0	13
合計記録数	189	397
平均記録数	4.7	10.2
中央位置	94.5	198.5
分散	0.77	14.68
標準偏差	0.88	3.83

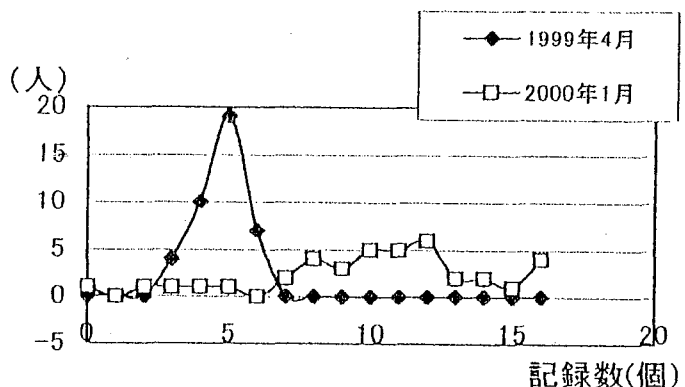


図3 記録数の度数分布

2. 表2の記録内容の変化について項目別でみると、1月に「形」「材質」の観察記録数が増加したことは有意であったが、「色彩」については、有意ではない。カテゴリー別に見てみると、4月の時点では持ち合わせていなかった“明度”“目測”“事実”の観察視点が、1月には出現し有意である。

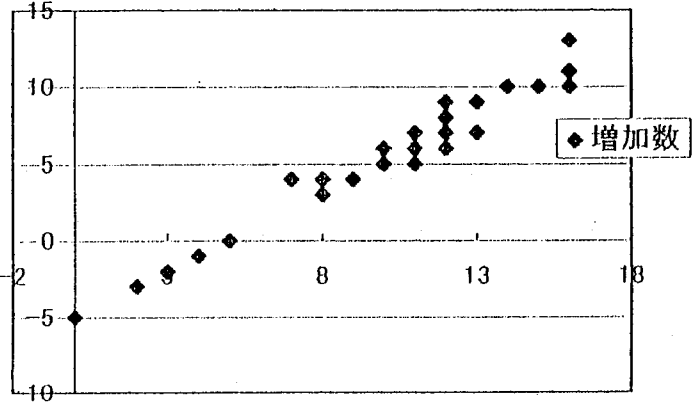


図4 個人別記録数増加の変化

表2 記録内容度数表 (**p < 0.1)

	カテゴリー	1999.4	2000.1	検定
色 彩	色相	31	35	
	印象	2	3	
	明度	0	10	**
	色彩合計	33	48	
形	印象	6	21	**
	容姿	10	7	
	外形	28	96	**
	目測	0	10	**
	形合計	44	134	**
材 質	材料	8	6	
	性質	2	26	**
	印象	11	28	**
	材質合計	21	60	**
そ の 他	用途	17	16	
	感情的印象	8	9	
	事実	1	32	**
	其他合計	26	57	**

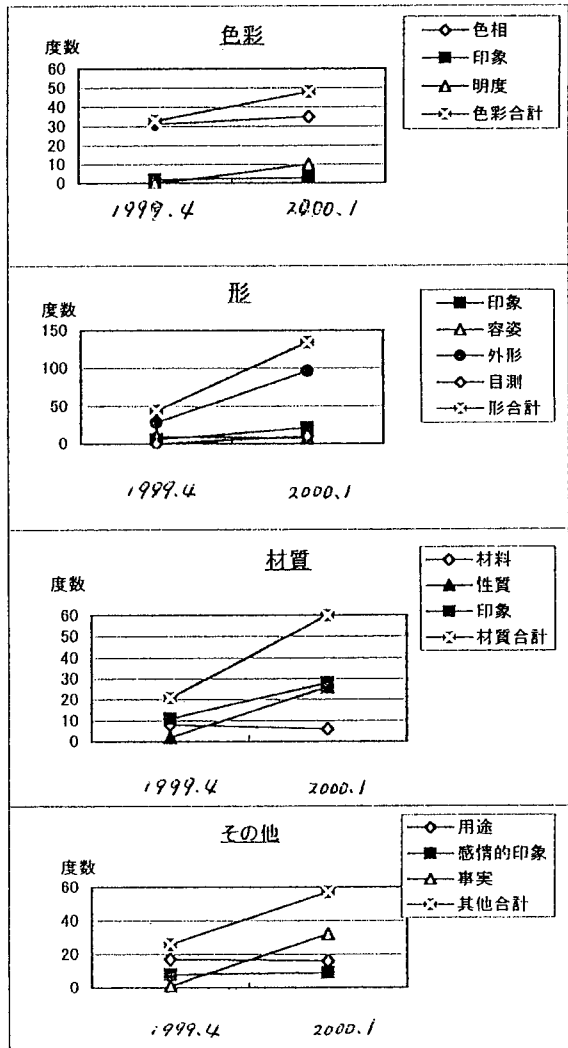


図5 記録内容の変化

図5に示すとおり、4月から1月の9ヶ月間で、8割近い項目カテゴリーの観察記録数は増加しており、そのうち6割弱の項目において有意であった。しかし、木の枝や人の腰というように何かに喩えて記録している“容姿”と素材や使用目的を考えた“材料”・“用途”は減少している。

3. 五感を使って観察ができていたかについては、4月は100%視覚で観察記録を行っていたが、図6が示すように、1月には1%とはいえ聴覚と触覚を使っていることが明らかになった。

表3から、視覚でとらえた観察数は2倍に増加しており、有意である。

表3 五感活用記録状況

	1999.4	2000.1	検定
視覚	189	391	**
聴覚	0	5	
触覚	0	1	
臭覚	0	0	
味覚	0	0	

(**p < .01)

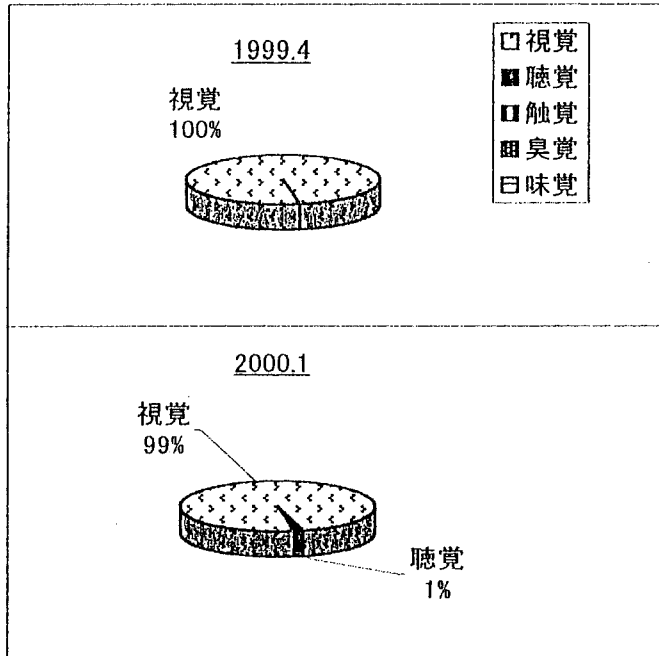


図6 五感活用状況の変化

IV. 考 察

観察とは、能動的に対象を注視してもたらされる知覚の集中であると、井尻¹⁾は述べている。知覚は選択的な性質を有し、心理の動きに呼応する。つまり、外受容性感覚(外感覚)からは絶えず取り込まれている無限の情報も、意識をそこに向けていなければ認知することはできない。また、視覚は他と違い、対象が時間・空間的にある範囲を超えない限り、ほぼ一瞬のうちに対象を把握することが可能な知覚といわれる。

今回使用した教材は、大きなひねりと中央のくびれを特徴とした暗赤色の花瓶(図1)である。観察の基本的な能力をとらえるために、人ではなく静物を選択した。単純ではない形状なので、一瞬にして見てとれる項目は多い。ひねりやくびれ以外にも、花瓶の口が斜めに開口している、表面に段差があつて線状に見える、光線の具合で色彩に変化が見られることなどが大きな特徴であろう。

20分の観察時間と、手に届く距離に花瓶を設置したことから、手法を工夫すれば多くのことが観察できるのではないかと予測した。しかし、開講当初の4月の観察記録は、1人平均4.7個しか出ていない。これは、学生が意識的に知覚を認知する状態になかったと考えられる。直感的把握と系統的把握に分類すると、直感的な内容が多く、その確認作業がおこなわれていないため、「重そう」と記録したものもいれば、正反対の「軽そう」としたものもいた。また、系統的把握がほとんどできないことによって、全体的に漠然としたとらえ方となっていた。

以上を、本専攻科生の現状としてとらえて、一年間の教育にあたった。教育課程は、表4のようになっている。介護場面に共通する技術として、コミュニケーション、観察・記録・報告、介護過程の展開の技術、感染予防、安全・安楽、リハビリテーションがある。そこで、介護技術教育の目標の一つに「介護福祉士に必要な観察の基礎的能力を身に付ける」を掲げた。観察の基礎的能力のなかでも、五感をフルに活用することと、主観的観察と客観的観察をうまくかみ合わせることを重点に置くことにした。各単元（表5）の授業展開においては、援助別に必要とされる観察内容を説明し、必ず観察の原則にふれるよう留意した。また、360時間を費やして介護実習を展開する。老人保健施設や特別養護老人ホームなどの学外施設で高齢者と接するという貴重な体験の中から、観察に関する経験を積み重ねる。日々の介護実践の場では、対象とする人の反応や全身状態を把握することが基盤である。

しかし、本専攻科学生は相手の反応や行動にまじかで接しているにも関わらず、そこで得られた情報を受け流す傾向にあった。日常生活の中で、無意識に働かせている知覚を、意識的に活用することは、学外の施設実習のような必然性の中で磨かれるのではないだろうか。そこで、教員巡回指導では、キャッチした情報を受け流している状況があることを学生自身が気づけるように関わった。原則的には、学生スーパービジョンの個別面接の形態を重視した。学生の介護場面に積極的に立ち合い、学生が気づいたことを実践の直後に述べてもらう。また学生の記録内容をもとに観察内容を確認した。介護福祉の業務遂行に必要な知識提供を加えながら、妥当性のある項目について口頭で表現させ、より信頼性の高い情報を引き出せるよう指導した。信頼性を高める手立てとして、数値化できるものは活用すること、直感的なことは五感を活用して確認することなどを教授した。

一年間の観察力の変化は、項目数から見ると大幅に増加している。また、目測であっても、数値を用いて大きさを表そうとするなどの変化も見られる。記録の手法を見ても、1月にはスケッチ(図2)という手法を用いている。これは、言語で表現し得ないことをできるだけ事実に忠実に再現しようとしたものであり、観察の原理原則を基盤に学生自らが描いたものである。これは、本専攻科の入学用件である幼児教育課程の既習学習が、関連したのかもかもしれない。

全体的な漠然とした物に例えた容姿や、調べればすぐに明らかになる材料・用途の項目は記録数が減少し、明度や外形、数値で表す目測が増加し、それらの項目は有意差もある。稲越²⁾らは、全体的な存在に対し知るという行為、特に科学的分析は限られた局面や水準でしかこの存在に接しえない。全体を部分に分割して理解すること自体は正しい営みであろう。問題は、全体的存在を説明する時に部分に関する知識を組み合わせて適切な理論を作ることにあるという。つまり、明度・外

表4 介護福祉専攻科 教育課程一覧

	前 期	後 期
必修単位	介護実習 I-1 介護実習 I-2 80時間 10時間 (5/24~6/18) (9/6~10)	介護実習 II 介護実習 III 135時間 135時間 (9/13~10/5) (11/15~12/7)
	介護概論 (4 単位) 介護技術 (3 単位) 障害形態別介護技術 (3 単位) 介護実習指導 (1 単位) 家政学実習 (2 単位)	
	老人福祉論 (2 単位) リハビリテーション論 (2 単位) 老人・障害者の心理 (2 単位) 家政学概論 (2 単位)	
選2 択単 必位 以修 上	医学一般 (2 単位) 高齢者の音楽指導 (2 単位)	心理臨床と心理相談 (2 単位) 高齢者の健康と運動 (2 単位)

形・目測といった部分の観察が際立って増えていることは、花瓶の全体像を正確に捉えるために、部分的な情報収集ができるようになりつつあることだと判断できる。そして、学生はできるだけ主観的な考え方や判断を避け客観的にとらえようとした結果ではないかと考える。

最後に、活用した受容器（ここでは五感といわれる視覚・聴覚・触覚・嗅覚・味覚をさす）別に見ると、4月は100%視覚から取り込んだものである。こ

れが1月には、聴覚5個と触覚1個の記述が追加されている。4月は花瓶に近づくものがいなかったため、視覚以外の受容器は活用していない。それが、1月になると、3名の学生が椅子から立ち上がって、花瓶に触れたり覗き込んだりして観察した。その中の学生が花瓶を振ったことから、あらかじめ中に入れてあった小物の音がしたのである。聴覚に5個出ているのは、それを聞き取った学生の記述であった。花瓶に触った学生が3名いたにも関わらず、触覚に関する項目に「なまぬるい」という記述一つしか出ていない。他の2名は、皮膚感覚以外のことを確かめる目的を持っていたのであろう。

観察とは能動的に対象を注視してもたらされる知覚の集中であることは先に述べた。視覚について、観察数の増加は有意であることから、明らかに能動

表5 介護技術授業単元一覧

	内 容
1	コミュニケーションの技法
2	観察とアセスメントの技法
3	介護計画の立案
4	記録と報告
5	安全で快適な住まい・生活環境の整備
6	運動・移動の技法
7	社会生活の維持拡大の技法
8	日常生活における基本介護の技法 (食事・排泄・衣服の着脱・入浴・身体 の清潔)
9	安楽と安寧への技法
10	医療、看護対応時の介助
11	緊急時故事の対応
12	終末期の介護

的に注視した結果が読み取れる。また、積極的に花瓶に近づく行動も1月になってはじめて見られたものであり学生の変容を示している。

人の知覚は、見る側の知識や注意、期待による構え(set)によって影響を受けると、稲越³⁾らが述べている。専門職としての知識や技術の習得によって、触覚と聴覚から取り込んだ知覚を認知するようになったことは、数値よりもさらに大きな価値をもつと考える。

五感の活用の一般的な割合は、視覚83%・聴覚11%・嗅覚3.5%・味覚1.5%・触覚1%である。このことと比較すると、筆者らが期待していた視覚以外の活用の伸びが極めて低かった。もう少し多くの学生に実際に対象物(花瓶)に触れてみるなどの行動を望んだが、他者と違った行動をとることを躊躇する世代の特徴からか、ほとんどの学生が一度着いた座席からは離れようとしなかった。今後、学生のレディネスをさらに理解し授業環境の見直しをする必要がある。

介護福祉士の養成期間が一年間という時間的な制約が大きい場合、一定の水準に到達するには、密度の高さが要求される。観察力の養成に関しては、観察数の大幅な増加、視覚以外の知覚の活用、記述方法の工夫などの結果から、本学の教育の密度は時間的な制約を十分に補えるものと考えたい。

安部³⁾は観察力を高めるポイントに、①教育、②訓練(経験)、③価値観の三つを挙げている。筆者らの教育方法は、この三つポイントを包括したものであったといえよう。

しかし、こうした変化の一方で、学生の個人差が拡大していること、また、記述数が0に減少してしまった学生の存在があったことの意味は大きい。ボルノー⁴⁾は、「経験」と「体験」の違いを次のように説明している。体験は自分と一体化し常に主観に偏し、経験は経験したことを客観化して経験したものごとのほうに注意が向けられている。このことから、記述数が減少した要因は、学生自身の学習意欲も関与するであろうが、ボルノーのいう「体験」に留まり「経験」に変えることができなかった教育方法にもあると考えた。

本研究では、観察力の変化を、「静物の観察」結果だけを基に考察している。また、“観察力”を①表現される数②表現の方法③表現の内容からとらえた事実だけで、判断しようとしている。これは、信頼性に欠ける危険があり、研究方法を再考する必要性を感じている。

おわりに

もっとも新鮮な情報は観察によるものであり、刻々と変化する人の「今」をとらえられるような能力を身につけることを望んでいる。表面上に現れる言葉や行動だけで、真の理解に結びつけることは危険であるが、表面に現れた情報を的確に把握することができなければ、介護は始まらないと考えている。

質の高い介護福祉士養成のために、今回の結果をもとに技術教育のあり方を追究したい。

〈参考文献〉

- 1) 井尻正二：科学論，築地書館，1966.
- 2) 稲越孝雄編：「わかりあい」の科学，福村出版，1986.
- 3) 安部陽子：情報を得る観察のポイント，看護実践の科学，Vol25，No1，p29-35.
- 4) O.F.ボルノー著・浜田正秀訳：人間的に見た教育学，1987.
- 5) 岡本民夫他編：介護福祉実習，川島書店，1990.
- 6) 川島みどり：看護観察と判断—看護過程の展開のために，看護の科学者，1988.
- 7) 逸見武光：行動を観察するということ，保健の科学，Vol38，No10，p670-673.
- 8) 吉谷須磨子：食摂取機能が障害された患者への援助 〈食欲不振にみる研究的視点をさぐる〉
臨床看護，Vol22，No1，p37-43.
- 9) 米山岳廣：社会福祉の援助技術，文化書房博文社，1992.
- 10) 田中未来：教育と福祉のための人間論，川島書店，1992.